

異文化コミュニケーション教育の試み — 高コンテキスト文化としての俳句 —

高 井 收

1. はじめに

日本の英語教育の改善にコミュニケーション能力の養成が叫ばれ、文部科学省指導により中等教育から高等教育まで教育現場での「使える英語教育」を目指している。平成 11 年に告示された高等学校学習指導要領によれば、英語教育の目標を「英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」と定めている。すなわち、異文化理解を深め、自己表現の出来るコミュニケーション能力を「使える英語」と考えていることになる。最近の教育現場でもそれを受けて、ずいぶん英語の教授法が変化し、実践的なコミュニケーション中心の授業が展開され出してきたことは喜ばしいことである。

筆者の勤める小樽商科大学でも毎年たくさんの国から留学生を迎え、英語で授業が行われ、日本人学生もそれらの授業に積極的に参加し始めている。このように、これからは、多言語、多文化の時代に入り、英語はひとつの共通語としての役割を果たしてゆくと思われる。そこで、最も重要なことは自分の文化の意識化であり、自己のアイデンティティーの確立である。それがしっかりしていないと文部科学省の言う、「自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力」にはつながらない。筆者が数年前アメリカに留学していた頃、まわりのアメリカ人から、「日本から来る留学生は英語の文法も良く知っていて、語彙力もあり、発音も余り問題ないのだが、いざ教室に入ると、他の国、たとえば中東などから来た留学生と比べても、発言が極端に少なくなる」とよく聞かされた。日本人学生の言い分は「そこまで言わなくても、そんなことぐらい、なぜ、わかってもらえないのだろうか」である。ここでは、言語を超えた文化の壁があるように考えられる。「異文化を知るには、まず自文化を知らねばならぬ」とはよく言われる言葉であるが、これからの英語教育においても、「自文化の意識化と、自己のアイデンティティーの確立」にもっと目を向けてゆかねばならない。

小論では文化を Hall (1976) の文化の型によって分類し、日本文化の一つとしての俳句における文化の型の事例を集めるのを目的とする。違った文化の型の接触において生じる問題やその考察に関しては将来の課題とする。

2. 文化の概念について

文化を考える際に実に多くの定義がなされていることがわかる。ある学者は 300 以上の定義を見つけている。そのなかでも共通して出てくる文化の要素というものがある。それをうまくまとめたのが Storti (1999) の次の定義ではないだろうか。

Culture is the shared assumptions, values, and beliefs of a group of people which result in characteristic behaviors. (p. 5)

この定義から、Storti は文化には大きく分けて二つの層があり、我々が行う日常の行動のように「目に見える文化」と、容易に見ることの出来ない人の内面に深く埋め込まれた「隠れた文化」が

あり、両者の関係は因果関係で結ばれていると言う。例えば、日本では伝統的な儒教の影響で、「孝」という親を敬う概念から目上に対する態度が、そうでない場合と異なり、行動もそれによって違えてきた。信念 (belief) は歴史や伝統的な事柄や、その他、個人の経験によって築かれるもので、その人の思考様式を形作るものである。このように文化はそのグループで保存され、継承される特質がある。また、価値観 (value) は物の善し悪しなどを判断する基準となり、ある面ではその人の道徳観も含まれる。価値観として Hofstede and Hofstede (2005) は次のようなものを挙げている。

悪い<->善い
汚い<->きれい
危険な<->安全な
禁じられた<->許された
上品な<->下品な
道徳的な<->不道徳的な
醜い<->美しい
不自然な<->自然な
異常な<->正常な
矛盾している<->論理的な
非合理的な<->合理的な

この信念と価値観は個人の内面的な要素であるが、その人が所属しているグループ内で共通に持ちえるものでもある。もうひとつの要素である「社会的に当然と考えられている基準 (social assumption)」はいわば、そのグループに属する人達が常識として認識し、それに伴って行動しているものである。例えば、日本において慶弔には熨斗袋の種類まで決まっていて、お金を贈るときに使われる。バーグランド (2004) によれば、アメリカでは「お金は皆が触れるものだから汚い (p.24)」という価値観により、結婚のお祝いとして人に現金を渡すことは無いと言っている。このような社会的な規準は、人々が価値判断をする時の基準ともなり得る。このように Storti の文化の定義を考えると、文化は信念や価値観など「個人の内面に深くかかわる要素」と、グループ集団における「社会的な規準いわば、常識というもの」、そして、それらによって「個人の行動」が決定づけられてゆくと言うように、三つのレベルから構成され、互いに関係し合っているのである。

Bennett (1998) は文化を大文字の "Culture" と小文字の "culture" とに区別して分析している。"C"文化は芸術、劇、古典音楽、あるいは舞踊など洗練され、制度化されたものを言い、客観的に観賞できるものである。その他、これはその国の社会制度や政治・経済の仕組みから言語体系まで社会的に確立されたものを指し、Storti の言う「見える文化」の一部に相当する。"c"文化は、主観的要素の強いもので日常生活に密着し、食文化や話し言葉の文化など人々の思考様式や価値観・世界観に密接に結びついているものであり、外国人が外から見てもなかなか認識しづらく、その文化内で長期間生活して初めて見えてくるものである。Storti の言う「隠れた文化」に良く似ているが、Bennett は行動もこれに含めて考えているところが Storti とは違った見方である。

異なった文化が接触することによってお互い影響しあう点から文化を説明しているのが Yoshikawa (1988) である。彼は「ダブルスウィングモデル」という独特な異文化接触理論を展

開している。文化は動いているものであり、異なった文化と接触することによって、その文化の持つ要素を取り入れ、適応していくものである。これは、同じ個人が状況によってその環境に適応し変化するのと同じである。例えば、よく言われる日本人の受動的なところは、固定されているのではなく、必要性を感じれば積極的に行動すると考えられる。バーグランドはこの点に関して「誰でも、一駅二駅しか乗らない場合は、席を取る必要性をそんなに感じないから、割とおとなしい。しかし、長く乗る場合はできれば席を取りたいので、積極的に座席に向かう (p.30)」と例を挙げて説明している。文化の特徴の一つである流動性を「ダブルスウィングモデル」はうまく捉えていると言える。

3. Hall の文化の型

文化の特色を考える際、その一つに、「文化は学習されるものである」というのがある。文化は一度特定な方法で学習されると、それとは別な方法で学習することはきわめて困難であるということも我々が経験上知っていることである。例えば、母語の習得を終え、次に別な言語を学習する場合にも大変な時間と労力を要する。Hall (1976) によれば、文化の大きな機能の一つとして、現実を認識する際に文化がそのスクリーンの役目を果たすと言っている。すなわち、現実は自分の内部にある信念・価値観などにより受け取り方が違ってくるもので、文化が我々の経験に意味づけをすることになる。それ故に、認識の方法（型）はその文化で学ばれるものであり、文化的背景によって直面する現実の認識が異なり、また、その認識が信念や価値観を作りだし、文化の型となるのである。信念は過去の経験から作られ、その人にとって真実として受け入れられるものであり、価値観はその信念によって影響され、何が真実で、正しく、美しいのかを判断する基準となる。文化の型は信念や価値観を総合的に捉え、体系化しようとするもので、異文化コミュニケーションの研究には欠かせないものである。

Hall は認識とコミュニケーションをコンテクストと言語とのかかわりあう度合いによって区別し、文化の型を「高コンテクスト文化 (High Context Culture)」と「低コンテクスト文化 (Low Context Culture)」と大きく二つに分けている。Hall (1976) によれば、コンテクストは「周りの環境、出来事」であり、その出来事の意味と密接に関係し、決して的確な意味は表さないとしても、コミュニケーションにおける意味付けはコンテクストに負うところが多いという。Hall の言うコンテクストとは非言語的なものであり、言葉や文章などの前後関係、背景知識、その他、それにかかわる事情という意味で、「行間」、「裏」または「真意」を読む必要性が大きい小さいかに別れるとも言える。Hall (1976) はコンテクストを過去の経験や神経体系のように人間の内部にあるものと、状況や環境など外部のものとの間に区別し、身分、活動、状況、経験、および変化と5つに要約している。高コンテクスト文化においては、それを共有する人達はその文化内のシステムを知っているという条件で個人の行動はプログラム化されていると考えられ、予想可能である。例えば、長いつきあいの中で生まれてくる親友関係などで、言葉で言い表さなくても分かりあえる場合である。この文化内においては、周りに気を配り、言葉ではなく、「察する」ことがコミュニケーションにおいて大切な要素となる。

それに反して、低コンテクスト文化ではお互い同士コミュニケーションをとる場合、背景知識などが少ないので、新しい情報が必要となり、言葉によるコミュニケーションが大切になる。極端な例を挙げれば、コンピュータのようにコミュニケーションを言語記号のみで取らなければならない場合である。よく東洋のコミュニケーションは高コンテクストであいまいな表現が多く、

「間接的で含みが多い」と言われる。また、それと比較して西洋では「直接的で明確なコミュニケーション方式」が取られると言われるのも、こうしたコンテキストから察する部分の必要性が大きい小さいかの差によるものであろう。こうした異なった文化圏においては同じ出来事を判断するのにも違った見方が成立する。例えば、沈黙に対する周りの人の受け取り方にも文化差が現れ、西洋では「否定的」に受け取られる場合でも、東洋では、「余韻を残すことになり良い意味として理解される」と Samovar et al. (2007)は言っている。Samovar et al. は Hall の文化の型に沿って、高コンテキストの要素の強い文化圏から低コンテキスト文化圏までを分類し表にまとめ、日本が高コンテキストの最も強い文化圏であることを分析している (p.159)。

バーグランド (2004) は高コンテキスト文化を「受信者責任型」と呼んで、低コンテキスト文化を「発信者責任型文化」と呼んでいる。コミュニケーションにおいて「察し」を重んじる文化ではその受信者に、言葉に加えて、周りの状況から判断することが要求され、一方「言葉によるコミュニケーション」を重んじる文化ではその発信者が言葉を明確に表現することが要求されるのであろう。

4. 俳句について

Hall (1959) によれば「あるグループに属する人々は型を共有し、同じものに関心を持つ」といわれ、日本のように高コンテキスト文化においては時間に対する認識やリズムに対する認識も一つの体系としてプログラム化されていると考えられる。同じ文化圏に属する人々は文化的背景や経験などのコンテキストを共有することによって、言語で説明しなくても理解しあえるのである。ここでは、その例として俳句をとりあげ、その中高コンテキスト文化の要素を分析する。

俳句は「日本人なら誰でも」と言って良いほど子供の頃から親しみを持っていて、句に季節感を詠み込み、5・7・5の17文字のリズムの心地よさを共有するものである。バーグランド(2004)によれば、「本来、日本人は自然と共存型の文化グループに属し、特に季節感という時間に対する感覚は細やかで、すばらしい文化 (p.69)」を持っていた。この自然との調和の文化の型に関しては、井沢 (2007) も日本人のアイデンティティの根底が神道であるとし、「あるがまま」という、自然と調和させた現実の認識は神道の世界観から来ているものであると言っている。四季の時間の見方は、過去から現在、そして未来へと直線的に過ぎてゆくのではなく、円周をまわるように、春は、夏、秋、冬と季節がめぐって、また戻ってくるのである。加藤 (2007) によれば、「円周には始めもなく、終わりもない。円周上の与えられた1点、すなわち現在の時点において人は過ぎ去ろうとする季節を惜しみ、来ようとする季節に期待するのである (p.66)」と言っている。俳句に詠み込まれる季語は、この日本人の季節感を表したもので、「日本人の心の中に、季というものが郷愁のように根を張っていて、ときおり私たちの詩情を刺激する (藤田 2001: 44)」この点においては年齢にかかわらず共通したものであると藤田 (2001) は言っている。彼はまた、俳句は「部分をとらえて全体を感じ取ってもらおう (p.132)」とするもので、季語によって表されたその時の、過去でもなく、未来でもなく、瞬間の感覚的経験を写實的に詠んでいると言う。藤田は「韻文である俳句は端的に言うなら『何が』『どうした』だけで表現でき (p.33)」、散文のように「てにをは」を使う必要は無いと述べている。

大樽 (おおぼた) を かえせば裏は 一面火 高野素

この句では作者が炉に暖まっている冬の季節が想像され「一面火」によって「思っていたよりも火がまわっていた」と感じている作者の瞬間の経験が伝わってくる。同じ経験 (コンテキスト)

を持った人にはそのことを説明しなくとも作者の意図が伝わるのである。俳句はこの点において Hall の言う高コンテクスト文化の例といえる。

藤田は、さらに「俳句はリズムと『今』が大切です (p.120)」と言っている。「韻文のリズムが俳句形式を支えている重要な要素の一つだ (p.16)」と言い、5・7・5の定型を最も重要に考えている。このリズムは日本人の耳には心地よく聞こえてくるもので、「とにかく12音の言葉のつながりを求めることに徹するのです (p.43)」と述べている。すなわち、5音と7音、または7音と5音の組み合わせである。

本買えば 表紙が匂ふ 雪の暮 大野林火
にせものと きまりし壺の 夜長かな 木下夕爾

この俳句のリズムがなぜ日本人に心地よく聞こえるかということについて別宮 (2005) は「四拍子のリズム感覚」によって説明している。日本語の特徴の一つに音節の等時性があり、日本語は撥音も促音も長音も含め、どの音もほぼ同じ時間の長さで発音される特質がある。別宮は「1音に八分音符一つをあて、2音をもって四分の四拍子の一拍を作るものとするのは、日本語の性格にもかなっている。というのは、日本語は2音節ずつ一つにまとめて組み立てられることを特徴としているから (p.61-62)」であり、「現行の神宮祭式では4度の拍手を2回くりかえすのは『八度拍手』と呼ばれ、あらゆる儀式のクライマックスをなす (p.196)」と述べている。確かに2音節語は日本語において一番自然で発音しやすい単位であることは父、母、春など日本語の基礎的な名詞を見てみると容易に想像がつく。俳句の5・7・5にも、5音にそれぞれ3拍休みを入れ、7音に1拍休みを入れることによって、四拍子のリズムを繰り返すことになる。

ふるいけや○○○かわずとびこむ○みずのおと○○○ 松尾芭蕉

この句で、最初と最後の5音の後の3拍の休止は余韻を表し、7音の後の1拍の休止は切れ目(ポーズ)を置いているのだと別宮は分析している。このように等時性のある日本語が四拍子をもってリズムを作り、俳句のリズムが出来上がっていると考えられる。

5. おわりに

日本の長い歴史の中で、神道を通し培われてきた俳句の季節感、およびリズムは日本人共通の世界観として共有することになったと考えられる。コンテクストとしての文化背景は長い時間をかけて作り出されてきたもので、文化は確かに変化すると言われるが、深いところでは、その変化も遅いものだと考えられる。俳句は日常的な文化ではなく文学性の高い特殊な領域に入るが、俳句を生み出した日本文化が高コンテクスト文化であるという一つの例証でもあると考えられる。

参考文献

- Bennett, M. J.(1998). *Intercultural Communication: A Current Perspective*. In Bennett, M. J.(ed.) *Basic Concepts of Intercultural Communication: Selected Readings*. Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc.
- Hall, E. T.(1959). *Silent Language*. New York: Anchor Books.
- (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Books.
- Hofstede, G. & Hofstede G. J.(2005). *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. New York: McGraw-Hill.
- Lustig, M. W. & Koester, J.(2006). *Intercultural Competence: Interpersonal Communication across Cultures* (5th ed.). New York; Person Education, Inc.

- Samovar, L. A., Porter, R. E. & McDaniel E. R. (2007). *Communication Between Cultures* (6th ed.). Belmont, CA: Thomson Wadsworth.
- Storti, C.(1999). *Figuring Foreigners Out: A Practical Guide*. Yarmouth, ME: Intercultural Press. Inc.
- Yoshikawa, M.(1988). Cross-Cultural Adaptation and Perceptual Development. In Kim, Y. Y. & William, G. B.(eds.) *Cross-Cultural Adaptation: Current Approaches*. Newbury Park, CA: Sage.
- 井沢元彦 (2007). 『仏教・神道・儒教集中講座』, 東京: 徳間文庫
- 加藤周一 (2007). 『日本文化における時間と空間』, 東京: 岩波書店
- バーグラント, ジェフ (2004). 『日本から文化力: 異文化コミュニケーションのすすめ』, 東京: 現代書館
- 藤田湘子 (2001). 『俳句の入り口〜俳句の基本と楽しみ方』, 東京: 日本放送出版協会
- 別宮貞徳 (2005). 『日本語のリズム: 四拍子文化論』, 東京: 筑摩書房